

湯浅治久著

『蒙古合戦と鎌倉幕府の滅亡』

(動乱の東国史 3)

吉川弘文館 二〇一二年・一〇月
四六 二九二頁 二八〇〇円

本書は、十三世紀半ばの北条時頼執政期から十四世紀前半の鎌倉幕府の滅亡までの通史を、東国に視点を据えて描いた一書である。

本書が対象とする時代は、鎌倉幕府が「国家」権力の中で果たす役割を増大させた時期にあたる。それゆえ、政治情勢は東国の幕府を基軸に動くことになった。しかし一方で、蒙古襲来・神領興行・悪党問題などの緊迫した社会情勢は、畿内・西国で顕著に現れた。そのため従来の通史では、主に畿内・西国で緊迫化した社会情勢に対し、東国の幕府が朝廷と足並みを揃えながら、得宗のもとに権力を集中させて対応する中で瓦解していく政治史を描くのがセオリーであり、幕府の膝元である東国の社会情勢を顧みることがほとんどなかった。これに対し本書は、幕府の動向を基軸に展開した政治史と、それに対応する東国の社会情勢に鋭く切り込んでおり、従来の通史とは一線を画す内容に仕上がっている。

本書の特筆すべき内容として、次の二点が挙げられる。一つ目は、これまであまり取り上げられてこなかった、蒙古襲来と東国の社会・御家人との関係を叙述している点である。蒙古との合戦

の舞台は北部九州だったため、蒙古襲来が日本社会に与えた影響は西国社会を事例に語られることが多い。また、参戦した御家人の様子も、絵画史料が残る西国御家人の竹崎季長を事例に描かれることが多い。しかし本書は、これらに触れながらも、蒙古襲来に震撼した東国社会の様相とそこに刻み込まれた恐怖の記憶、そして九州へと向かう東国御家人の心情を紹介して、蒙古襲来の情報に接した東国の社会・御家人の動静を描き出している。二つ目は、千葉氏を題材に、東国御家人の全国的な家産経済の実態と、東国御家人によって支配された苛酷な地域社会の現実を浮き彫りにしている点である。莫大な富が支配者（御家人）のもとに蓄積され、それを動かす為替や割符といった信用経済が発達する一方で、地域社会では度重なる御家人役の転嫁による負担に苦しむ百姓や災害・飢饉が起こる度に年貢未進によって債務奴隷へと転落する百姓が数多くいた事実を析出し、著者は鎌倉時代までの日本社会の特質を、「社会の発展が即、地域の生活世界の発展に結びつかない構造をもった社会」（二五頁）だったと喝破する。

鎌倉期の東国の社会情勢を窺う史料は極めて乏しい。こうした史料制約のある中、著者は、鎌倉仏教の祖師の中で唯一の東国出身者である日蓮の行動に焦点を当て、さらに彼が書き残した書状類と経典の裏から発見された『日蓮遺文紙背文書』とを縦横に駆使することで、鎌倉期の東国の社会情勢を鮮やかに描き出すことに成功している。本書は、長年、中世東国の地域社会史研究に携わってきた著者の力量と研究成果が凝縮された一書であり、当該分野の第一人者たる著者の面目躍如となっている。日本中世史

に関心を持つ方々に広く一読をお薦めしたい。

(田中大喜)